

# 伝染性紅斑が再び増加しています

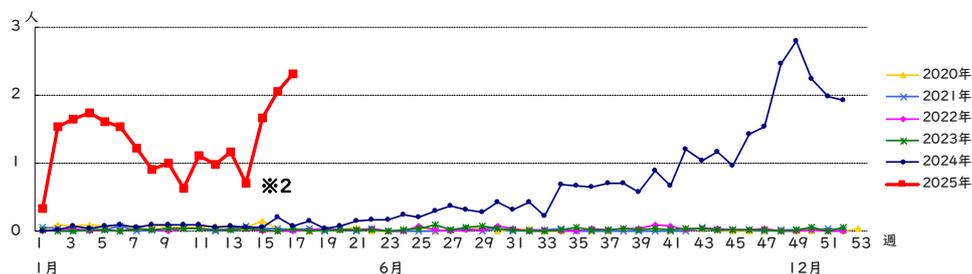
## 【概況】

2025年第17週(4月21日~4月27日)の定点あたりの患者報告数<sup>※1</sup>は、市全体で **2.31** となり、第15週(4月7日~4月13日)以降、再び増加しています。  
 患者の年齢構成は、4~5歳を中心に報告が多くなっています。

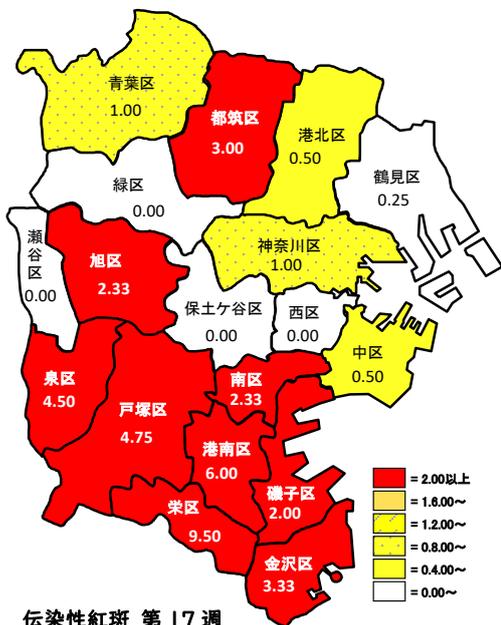
※1 定点あたりの患者報告数とは、1週間に1回、定期的に患者発生状況をご報告いただいている医療機関(伝染性紅斑は小児科定点51か所)から報告された患者数の平均値です。

## 【市内流行状況】

2025年は、4月上旬から報告数が増加しています。  
 患者の年齢層は、4~5歳が中心で全体の43.2%を占めますが、小学校低学年相当の報告も多くなっています。



※2 2025年第14週(3月31日~4月6日)以降、報告医療機関数が変更となっています。



## 伝染性紅斑とは

ヒトパルボウイルス B19 による感染症で、両頬がリンゴのように赤くなることから、「リンゴ病」とも呼ばれています。通常は春から初夏にかけて多く発生します。かぜ様症状から7~10日ほど経過後、両頬に紅斑(皮膚が赤くなる)が現れ、続いて手足に網目もしくはレース状の紅斑が現れます。小児を中心に流行する症状の軽い感染症ですが、妊娠初期に感染すると、流産や胎児に異常を起こすことがあります。また、感染していても症状が出ない不顕性感染の人が25%程度います。感染経路は、飛沫感染(咳、くしゃみなど)、接触感染(感染者の飛沫などに触れた手で、口や目などの粘膜を触ることによる)です。アルコールが効きにくいため、予防には石けんによる手洗いと咳エチケットが重要です。



国立感染症研究所 HP より

## 登校(園)基準

「学校において予防すべき感染症の解説」では、発しん期には感染力はないので、発しんのみで全身状態の良い場合は登園・登校が可能とされています。

(※ 感染力があるのはかぜ様症状の出ている時期で、発しんが出た時にはほとんど感染力がありません)

【お問い合わせ先】 横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課 TEL 045(370)9237  
 横浜市医療局健康安全課 TEL 045(671)2463